T I C O

Face to Face

TICOは保健医療・農村開発などの分野で、アフリカ・アジアで支援活動を行っている国際協力NPO法人です。
地球規模の問題に苦しむ人たちの自立支援を共同作業により実施し、そこで学んだ経験と知識を地域の人々とわかち合い、私たち自身のライフスタイルを振り返るとともに、地域の精神文化の昂揚に寄与することを目的としています。

TICO 季刊ニュースレター　No.25　2011年4月号

カンボジア
事業終了！
昨年末をもってプノンペン市での事業が終了しました！３つの成果をご報告します。
☞*p.2-3*

カンボジア
職員離任の挨拶
カンボジア事務所の閉鎖に伴い、現地で尽力していた職員２名が離任することとなりました。
☞*p.4*

ザンビア
デモ農場にて
化学肥料に大量依存せず、経済的にも環境的にもやさしい農法を実践的に学んでいます。
☞*p.5*

ザンビア
SMAG養成研修
『安全なお産支援グループ（SMAG）』メンバーを養成するための研修が行われました。
☞*p.6*

ザンビア
農村開発ローン
３グループが相次いでローンを完済しました！サポーターの皆様、ありがとうございました。
☞*p.7*

エコロジカル・フットプリントとエコビレッジ

TICO 代表　吉田　修

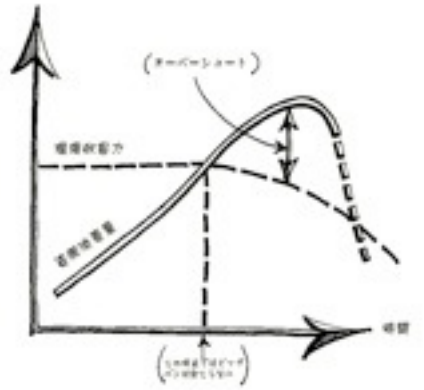
エコロジカル・フットプリント

あまり聞き慣れない言葉かも知れない。

簡単に言うと「人々が消費するあらゆる資源を生産し、かつ排出する廃棄物を処理するのに必要な土地面積」、もっと簡単に言うと「人間が踏みつけている土地」のことである。お米を食べたら田んぼの面積、牛肉を食べたら牧場／飼料を生産する畑の面積、石油を燃やしたら二酸化炭素を吸収する森林の面積、などなどの総計である。

よしだ・おさむ：自称兼業農家（外科医）
徳島県出身。アフリカをはじめ世界各国にて国際医療支援活動を実施。現在吉野川市山川町のさくら診療所で地域医療を実践しながら、代表としてTICOを運営。

現在の人類全体では2.3㌶、日本人は4.8㌶、アメリカ人は9.7㌶となっている。しかし、地球の生産性のある土地を人口で割ると1.9㌶しかない。0.4㌶の赤字であり、蓄えを食いつぶしているオーバーシュートの状態（下図参照）である。

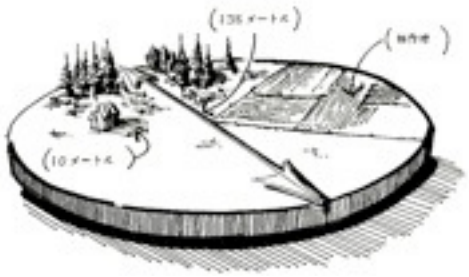


現在は森林を食い潰したり、二酸化炭素濃度が上昇したりしているが、直ちに破局が来るわけでない。しかしグラフの急降下の部分はこのまま行くと必然である。急激な生産の低下、人口の激減（人類の大量死）が起ると予想される。既に多くの生物種が絶滅、あるいは絶滅危惧種となっている。

地球１個分の暮らし

世界中の人が日本人並みの暮らしをすると、地球が2.4個、アメリカ人なら5.3個必要だ。かけがえのない地球は１個しかなく移住可能な惑星もない。人類は「地球１個分の暮らし」をするしかないのである。

では、「地球１個分の暮らし」とは、どのようなものだろうか？
１：自然エネルギーに依存する
２：有機農業を基盤とする
３：森林を保護し、生物多様性を確保する
４：もちろん脱化石燃料、脱原発
５：脱軍備、平和共存
６：のんびりした人間らしい暮らし
これはエコビレッジ（※）の概念ではないだろうか。「地球１個分の暮らし」をする地域／コミュニティーである『エコビレッジ』が増えていくことを望む。



公平に地球を分けた場合の一人当たりの面積

※「お互いが支え合う社会づくり」と「環境に負荷の少ない暮らし方」を追い求める人々が作るコミュニティのこと（エコビレッジジャパンネットワーク ホームページより）

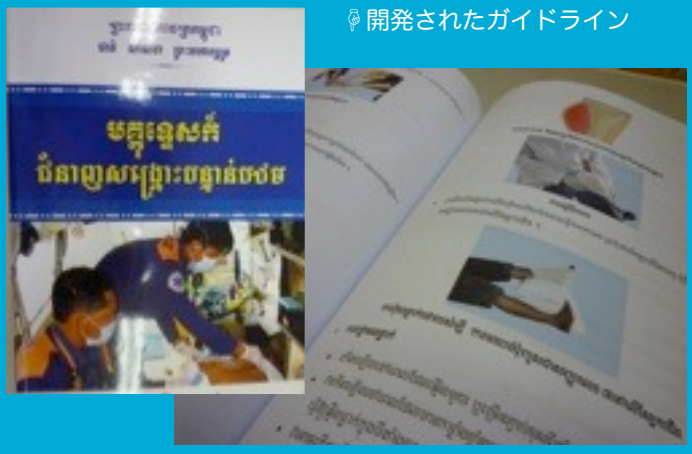
参考文献（図も同著より引用）
マーティス・ワケナゲル、ウィリアム・リース著「エコロジカル・フットプリント 地球環境持続のための実践プランニング・ツール」、合同出版、2004年。

カンボジア／プノンペン市西部地区低所得者層の人

プノンペン市西部地区は都市と農村のはざまにあり、田園風景が広がる地域や工場が立ち並ぶ地域、人工的に造られた地域等、さまざまな文化・歴史的背景が異なる人々が暮らしています。変化がめまぐるしい地域であり、人口増加に伴い交通事故も多く発生しています。TICOは2007年に調査を開始、現地事務所を設置し、JICA草の根パートナーシップ事業である「プノンペン市西部地区低所得者層の人々の命を

1　プノンペン市の救急対応ガイドラインが、現状分析に基づいて開発される

カンボジアでは救急搬送された医療機関でも、必要な機材が整っていないために適切な救急対応が受けられないケースが多く見られました。このガイドラインはこうした課題を軽減し、診療所レベルで必要な救急対応能力を身につけることを目的に作成されました。



開発されたガイドライン

当初は、インドのファーストエイドの教科書をカンボジアの言葉であるクメール語に翻訳・校正し、印刷する予定でしたが、内容に古い箇所があったためその部分を更新するとともに、包帯の巻き方など図や写真を多用することで、読み手にとって理解しやすいよう工夫しました。また、より身近に感じるようにと、使用する写真をクメール人（主にTICOスタッフやワーキンググループの先生方）にすることでオリジナリティーを加えています。

合計で1500部印刷し、20州4特別市の州保健局、保健行政区、州警察局、ヘルスセンター、ヘルスポスト、医療技術者養成学校へ配布しました。

配布は、編集を担当したワーキンググループメンバーが各州へ直接冊子を届けるとともに、ガイドラインの作成目的や活用方法の説明、各地域における現状や今後の活動方針（トレーニング実施計画等）について意見交換をするガイダンス形式で進められました。配布をガイダンス形式で行うことで、保健省と州保健局がガイドラインを活用したトレーニング等次年度の活動を協議する上で非常に有益であったとの意見が関係者から聞かれました。

今後は保健省が版権を持ち、最新の情報を盛り込みながら、4、5年後を目処に改訂版を発行していく予定です。

2　医療従事者の救急対応に対する知識と技術が向上する

プノンペン市西部保健局にある6つの公的医療機関から2名ずつ、12名のTOT（指導員）育成を行うとともに、6医療機関スタッフ全体の研修を行いました。同時にODWのポチェントン病院内に組織した救急隊の病院前救護のトレーニングを行いました。

日本において医療機材の少ない環境における救急対応を研究し、日本の知見をカンボジアで応用することによって、高額な医療機器に頼るのではなく、必要最低限の機材による適切な初期対応を行うトレーニングの実施を心がけました。

直接的な成果としては、12名のTOTのうち4名は、他の医療従事者に対して講習を行う能力を身につけることができ、

トレーニングの様子

々の命を守るセーフティーネット強化事業終了報告

守るセーフティーネット強化事業（命を守る事業）」を実施するとともに、香川県高松市のNGOセカンドハンド等と協力しながらプノンペン市救急隊養成事業を行ってきました。この度、2010年12月に「プノンペン市西部地区低所得者層の人々の命を守るセーフティーネット強化事業」の3年間の実施期間を終了しましたので３つの成果について以下、ご報告いたします。

3 地域住民の初歩的救急対応の知識が普及する

クモイ診療所およびサムロンクロン診療所の管轄地域である2地域12ケ村において「住民」と「病院・診療所、救急車」をつなぐ役割を担ってもらう事を目的として、各村につき2～3名の地域ボランティアの育成を行ってきました。

加えて、2010年3月より各村の地域ボランティアが主体となり、12ケ村の全世帯を対象として「119番通報」や「初歩的な応急手当」の対応に関する知識を住民に普及させることを目的として啓発ワークショップを実施してきました。

交通事故を想定したデモンストレーション

救急隊は、気道確保、CPR、脊柱固定、ヘルメット除去については日本の救急隊と遜色ないレベルになっています。

副次的な効果としては、JICA草の根地域提案型事業である「香川らしい国際協力プロジェクト」と連携することで、香川県で研修を受けた医療従事者がトレーニングのファシリテーターとして活躍し、また、香川県に派遣された医師、本事業で養成したTOT等を中心としてプノンペン市初期救急に関するトレーナー委員会（仮称）がプノンペン市保健局内で結成される等自主的な取り組みが出てきています。

今後も有力な医療従事者を日本に招聘する等で効果の持続と向上を図っていきます。

啓発ワークショップは、2地域12ケ村において合計39回開催し、参加者は合計1,867名（延べ人数）に上りました。
また、啓発活動終了時調査の結果では下記のことが明らかになりました。

地域ボランティアを知っていますか？

「知っている」と答えた人の割合

実施前39.2% → 実施後50.5%

公立救急車の要請番号について知ってますか？

「知っている」と答えた人の割合

実施前15.6% → 実施後37.7%

公立救急車の要請番号の情報源としては、順に「啓発ワークショップへの参加（54.2%）」,「啓発ステッカー(21.7%)」、「家族から聞いた(13.3%)」と、ワークショップによる影響が見受けられました。

また、公立救急車での搬送を希望する者が69.1%と「公立救急車を要請する」というこれまでにはなかった習慣が根付きつつあることがわかりました。
※救急車には「死体を運ぶ車」「高額な費用が請求される私立の救急車＝怖い」といったイメージが根強くありました（Face to Face22号参照）。

今後の支援の方向性について

「プノンペン市西部地区低所得者層の人々の命を守るセーフティーネット強化事業」の3年間の実施期間を終了するに伴い、カンボジア事務所を閉じ、プロジェクト開始当初からのカウンターパートであるポチェントン病院へ拠点を移して支援することとなりました。

これからはセカンドハンドの協力の下、医療従事者の救急対応能力向上について**日本への招聘**を行うとともに、定期的に**日本人医師等を派遣**し、医療従事者の研修、住民啓発活動のフォローアップ、救急隊の支援等を行っていく予定です。

今後も変わらぬお力添えをお願いいたします。

離任のご挨拶

大坪加奈子（事務所長）

約2年間弱の間、カンボジア事務所にて勤務しておりましたが、事務所閉鎖に伴い離任することとなりました。事業の途中でかかわる事になり、かつ現場での責任者を任され、経験が浅い私にとって全てが勉強の日々でした。

日本で表象されているカンボジアのイメージは「貧困」、「地雷」、「ポル・ポト政権下での大虐殺」というものが大きな比重を占めていると思いますが、私がカンボジア人スタッフや村の人々とかかわる中で一番印象に残ったことは「生きることへの貪欲さ」です。受動的で弱いだけの存在ではなく、さまざまな機会を見つけては、それらを上手く利用しながらなんとか生活を向上させていこうとする人々の力強さというものに圧倒されました。

▲左から田中（前号でインターン終了）、大坪、下地

一方で、さまざまな援助機関が入れ替わり立ち替わり出入りする中で、「援助がもつ負のインパクト」というものも目の当たりにもしました。時間がかかっても人々が自分たちでやっていけることも、援助が入ってしまうことで人々が援助に依存してしまうという現実がありました。それらは、「これから何をすればいいのか」という自分にとっての課題を浮かび上がらせてくれた貴重な経験でもありました。そして、これからも「実務」と「研究」の往還作業を行いながらカンボジアと関わっていけたらと願っています。

最後に、私たちの活動を温かく見守り、支えてくださいました支援者のみなさま、TICOスタッフや関係機関のみなさま、本当にありがとうございました。

下地美歩子（業務調整員）

TICOカンボジア事務所において、事業最終年度の業務調整を担当いたしました。事業では、カンボジア保健省と協働で作成した「病院・診療所のための救急対応ガイドライン」を担当し、それに係る編集・印刷・全国配布に携わりました。

当初はカンボジア保健省との折衝が難航し、どうなることかと思いました。交渉が行き詰った時にとことん話し合いを持つことで、少しずつカウンターパートとの間で、掲げた事業目標を必ず達成するぞという気運が高まったことはうれしい成果でした。

今回作成されたガイドラインがカンボジアの医療現場で多くの人に活用され、カンボジアの人々の救命率の向上につながることを切に願います。

今回の事業で得た経験を生かし、今後もより一層精進していきたいと思います。TICOの活動をご支援いただいている皆さまに深く感謝するとともに、カンボジア事業を常に強力にバックアップしていただいた関係者の皆さんにもこの場を借りてお礼申し上げます。

支援のカタチ　～橋本伸子さんの場合～

2月5日、6日『ワン・ワールド・フェスティバル』出展のお手伝いに参加し、多くの団体が世界に飛び出し、平和と飢餓撲滅のために支援されている様子を知りました。徳島の地方から世界に発信するTICOの活動をもっと広めたいと思います。

TICOを知ったのはいつの頃だったのか―『Face to Face』を調べてみると2004年版の寄付者の中に名前があったのでその少し前だと思います。職場に新しく配属された方が、TICOの活動でザンビアまで行ったと話され、現地での写真入りの記事のプリントをいただき興味を持ちました。なぜ徳島なのか、なぜザンビアなのか、今思えば気になるところですが、何も思わず、それから少しばかりの寄付を続けています。ユニセフや他の大手援助団体からは世界の悲惨な状況を知らせる便りが届きます。TICOも記事にならないところでは、かなりの困難を乗り越えてこられたでしょうが、素朴であたたかな雰囲気がいつも便りから伝わります。頑張りすぎないことが長続きのひけつかもしれません。あたたかな人と人のつながりを大切にするＴＩＣＯをこれからも応援していきたいと思います。（写真右奥が橋本さん）

ワン・ワールド・フェスティバルでは、橋本さんを始めとする6名のボランティアの方にお手伝いいただきました。
ご協力どうもありがとうございました！

ムサンゴを植える受講生達

吉田純（事務所長）

新しいことを始めるとき、皆さんはどんな気持ちになるでしょうか。自分の生活に大きく影響するような新しいこと。大きな**チャンス**かもしれないけれど、大きな**リスク**ともなるかもしれないこと。

Face to Face 22号でお伝えしたように、チペンビ農業大学の協力の下、化学肥料に大量依存せず、経済的にも環境的にもやさしい農法を実践的に学べる場、デモンストレーション農場（以下、デモ農場）を建設しました。

新しい知識を自分の畑や庭で試してみたいけど、失敗したらその年の食べ物が減ってしまう。本当に効果があるの？？そんなチペンビの人たちに「じゃあ、この畑を使って思う存分試して！」といえる場所です。

といっても、現実はそれほど簡単ではありません。ただでさえ自分の畑で忙しい農繁期に、家から遠いデモ農場を手伝うのか？？という当然の疑問が生じます。収穫という結果がでるまで半年近くかかる農業案件は、参加者のやる気を維持するのが大変。近隣地区5名の方がチームを組んでデモ農場を運営管理していますが、本当に意義を見出してくれる人だけが日々の細やかな作業を進めてくださっています。

一般農家向けには、コンサベーション・ファーミング・ユニットという化学肥料と有機肥料を効率よく使用する農法に関する技術を普及している団体と一緒に、デモ農場の土地整備、耕作、種蒔き、有機肥料ともなるムサンゴ（アカシア科）の苗木の植え付け等の手法を実践方式で学んでもらっています。

今年蒔いた種がどの程度育ち、どの程度収穫できるのか—そんなことはやってみないとわかりません。重要なのは、「ひとつひとつの作業」そのもの。運営チーム曰く「今年はほんの１年目。収穫の時期にどんなふうになっていてもそれはそれ。大事なのは、来年そしてその次の年と、少しづつ良くなっていくことだ。そして、それを自分達の庭や畑で実践できるようになること！」
結果は後からついてきてくれると信じて、今日も汗水流してます！

※本事業は平成22年度地球環境基金助成事業です。

2011年2月には日本から小林勉専門家を招いて「肥料の正しく安全な使用方法」「各土地の状況にあった肥料の使い方」等の『すぐに活用できる講義』をしていただきました。

ご支援ありがとうございました

TICOの国際協力活動は、皆様からの寄付金や会費によって支えられています。温かいご支援をお待ちしております。

寄付をいただいた方(書き損じはがき等含む)

木原綾子、松山キヨエ、福山知子、原田栄枝、河合龍雄・純子、地造津根子、森章子、篠原弘子、石田亘良、今心（株）、青木君夫、香西邦明、松田千文、寺田由紀、井上さおり、田淵規子、日浅芳一、原田恵子、白石勝美、高木クニ子、高松工芸高校インターアクト部、金納千晴、西村歩、三木、酒井雄二、篠原隆史、中原昭雅・倭子、ツダヒデコ、羽里ヨシミ、TICOサポートクラブ、美馬文子、呉相換、上浦邦子、真田ユリ子、山岡智亙、佐藤知里、高松聖ヤコブ協会婦人会、寺口美香、副島光江、大多和通夫、笹井美由紀、坂田、ハマ、桜井一夫、西本シゲ子、能田千春、原田慎之・功恵、石橋万理、北島コーポレーション、相生中学校3年生、弓削田裕子、野口節子、船津まさえ、横浜市立鶴見中学校、谷崎範子、小西和子、津田道子、藤井節子、安本カチエ、山下卯彌香、秋月益子、神谷保彦、花井郁恵、(特活)歯科医学教育国際支援機構、馬渕明子、田崎小百合、大西賀奈子、野口政司、中村恵美子、田淵幸一郎、森山小学校、加藤かえで、山崎順子、西愛正、亀井秋好、庄田多江、滝川麻衣、匿名7名

新たに入会された方

島田真美、平尾高行、増田由茉、山口瑞穂、黒田美穂、大濱哲、滝川麻衣、酒井雄二、能田千春、（株）つみきハウス、室谷直樹、匿名1名

会員を更新された方

小野裕次、笹井美由紀、近森憲助、寺口カミコ、長野茂夫、杉山未紗、石橋万理、岩田祥三、饗場和彦、関野聡美、武市秀男、中村美恵子、西村歩、馬渕明子、森山庄八、金納千晴、高井美穂後援会事務所、坂東正章、秋月益子、松田千文、大西和賀、入交秋子、白石吉彦、塩田勉、太陽と緑の会福祉事業団、北島コーポレーション、後藤田健二、山田智康、阿部正通、和田快、冨峯康代、石川良司、佐藤晃、匿名1名

●2010年12月17日～2011年3月22日分
●順不同、敬称略

TICOへのご寄付の方法

郵便振替 — 01640-6-37649（加入者名）TICO

銀行振込 — 四国銀行　山川支店（店番号344）
普通 0199692
特定非営利活動法人TICO
代表理事 吉田修
カナ入力の場合は、トクヒ）テイコ

募金箱 — さくら診療所（徳島県吉野川市）に常設しています。

インターネット — TICOウェブサイトのバナー広告をクリックして、そこからお買い物していただくと、代金の一部が寄付されます。詳しくはホームページをご覧下さい。

『安全なお産支援グループ』養成研修　実施

チボンボ郡 地域住民が支える安全な妊娠/出産の支援事業

酒井浩子（保健医療専門家）

モンボシでは安全な妊娠・出産のための環境づくりを目標とした3年間のプロジェクトを行っています。自宅分娩が多いモンボシで妊産婦保健に関する健康教育を行い、施設分娩をすすめ安全な妊娠・出産をめざしていく「安全なお産支援グループ（SMAG；Safe Motherhood Action Group）」はこのプロジェクトを支える柱です。

2011年1月31日から2月11日にかけて、『安全なお産支援グループ（SMAG）』メンバーを養成するための研修が行われました。モンボシの全10地域の住民保健委員会のメンバーの中から選ばれた女性を中心とした32名がそれぞれ5日間の研修を終え、SMAGメンバーとして活動を始めました。

研修の様子①

研修の様子②

『安全なお産支援グループ』といっても彼らが実際に出産を介助することを目的としているわけではありません。住民に正しい知識を広め、妊婦健診や施設分娩の大切さを伝え施設分娩をすすめてゆく、云わば母子保健におけるコミュニティとヘルスポストの橋渡し役。

メンバーは研修を通して、妊娠、出産、産後のケア、新生児ケア、家族計画から乳がんまで、安全な母性のために必要な知識を得ました。

終始熱心に講師の話を聞き、質問も活発。グループワークではそれぞれがこれまでの自分の保健ボランティアとしての経験をもとに知恵を出し合います。

☞次項へ

お母さんと赤ちゃんのための

♛クリスマス募金総額発表♛

554,289円（3/22迄）

お母さん達が安全に出産できる環境づくりを目指して、**「お産を待つ家」**（遠隔地に住む妊婦が陣痛前から出産まで待機できる宿泊所）の建設をはじめ、様々な活動に有効に使わせていただきます。

目標金額は400万円。

あなたからのご支援が、モンボシのお母さん、赤ちゃん、その家族の笑顔をサポートします。

※寄付先を妊産婦ケアと指定下さい。

チペンビでの小規模ビジネス発展中！

黒田晶子（業務調整員）

良きライバル、揃って完済！

昨年２月にTICOから150万クワチャ（約3万円）のローン支援を受けて、ヤギの飼育販売事業を実施している「ブテコ女性の会」グループ、「マサカサカ」グループが2011年2月に揃ってローンを全額返済しました。

ヤギの飼育は利益が出るまでに１年以上の時間がかかる事業なので、ブテコグループは村で経営している小さなお店の売り上げから、マサカサカグループは炭焼きで得た収入から返済を行ないました。同時期に同事業でローンを開始した２グループはお互いをよきライバルとして、競い合いながら返済を続けてくれました。

▲「ブテコ女性の会」グループ

▲「マサカサカ」グループ

カリヤンギレはわずか半年で返済！

昨年７月に同じく150万クワチャでローンで干し魚の販売を開始した「カリヤンギレ」グループは、通常１年間で返済予定のローンをなんと６ヶ月間で返済しました。「一年かけてゆっくり返済を続けないの？」という私の言葉に、「干し魚だけじゃなくて、自分たちで新しい事業を始めたいからTICOから借りたお金は今返しておきたいんだ。」という力強い答えが返ってきました。

ローンを開始した時とは見違えるほど自信に満ちたメンバーの笑顔が印象的です。

▲「カリヤンギレ」グループ

出資いただいた皆様、どうもありがとうございました！これからも応援よろしくお願いします。

☞前項つづき

「妊産婦死亡、家族計画に非協力的な男性、思春期の問題、若年結婚／若年妊娠･･･。今回取り上げられたこれらの課題は実際に私たちの村で起こっていること。簡単ではないけれど、これらを克服するためにSMAGとしてコミュニティの母子保健のために貢献していきたい。知識を得たいま、自分たちにはそれができると思う。」修了式では参加者たちは自信に満ちた頼もしい声が聞かれました。

走りだしたばかりのグループですが、今後の地域での活躍を期待するとともに一緒に課題に取り組んでいきたいと思います。

※本事業はJICA草の根技術協力事業として実施しています。

「救急車が全然来なくて･･･」

年明けにモンボシから悲しい知らせが届きました。

18歳の妊婦さんが出産後、出血が止まらず亡くなってしまいました。救急車を呼んでも郡に一台しかない救急車は遠方で他の患者搬送のため出動中。モンボシに到着したのは通報から6時間後。そのときには既に手遅れでした。赤ちゃんも死産でした。

彼女は極度に痩せていて不健康な状態でした。出産時のリスクが高いことはわかっていたので、医師がいてより治療体制が整っている郡病院で出産するようアドバイスされていました。陣痛が始まりヘルスポストに来たときもヘルスポストの看護師は郡病院に行って出産するよう勧めました。

しかし彼女と夫はそれを拒否し、ヘルスポストで出産することとなりました。その理由は出産のための準備ができていないこと、そのためのお金と病院でかかる費用が準備できていないこと、そして慣れない場所に行きたくないということでした。

「夫は彼女のことをどうでもいいと思っていた訳ではなく、とても大切に思っていた。だからヘルスポストまで連れてきた。でもそれが彼らにできる精一杯。彼らはとても貧しかった。これは本当に悲しいこと。すべてのハイリスク妊婦は病院で出産するべき。この状況をどうにか改善できるようSMAGメンバーと一緒に取り組んでいきたい。」とヘルスポスト看護師は言います。

四国放送の番組内で紹介されました！！

在徳島の民放テレビ局「四国放送」が、JICAマスコミ海外派遣事業としてウガンダで活躍する徳島県出身の青年海外協力隊の様子と、ザンビアでのTICOの活動を取材しました。

12/15　フォーカス徳島（18:16～）
　　ンゴンベ地区民生改善事業
12/16　フォーカス徳島（18:16～）
　　チペンビ地区農村開発ローン事業
12/17　フォーカス徳島（18:16～）
　　モンボシ地区プライマリーヘルスケア事業
12/22　おはよう徳島（6:30～）
　　総合版

昨年末、上記日程で放映され、会員の方を始め県内の方々から多くの反響をいただきました。

書き損じはがき、未使用はがき集めています！！

前号にてお願いをしたところ、**906枚**のはがき（書き損じ分366枚、未使用分550枚）が集まりました。

切手に交換していただいたり、未使用の切手もご寄付いただきました。ご協力いただいた皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。引き続き収集していますので、ご支援よろしくお願いいたします

事務局長 福士庸二のつぶやき 『てほん』

ザンビアの南隣の国、ジンバブエにあるテンゲネンゲ村を紹介します。もう14,5年も前にこの村を訪れ、大変な驚きを覚えました。

首都ハラレから車で荒野を2時間ほど北へ走った所に位置する小さな村なのですが、なにやら様子が違うのです。アフリカではおなじみの赤土の道にマッシュルームハウスが並びいつもの光景と思いきや、家々の前にはなぜか車が・・・。そして家の中からレゲエミュージックが大音響で鳴り響いているのです。あたりには電気が来ている気配はありません。そして、何より驚くのが道端に立ち並んでいる数え切れないほどの石の彫刻です。

▲石を彫るジンバブエの若者

そうここは村自体が彫刻の共同体なのです。

南ア生まれの白人農夫トム・ブロームフィールド氏が近くで採れる石を使った彫刻を村人たちに教え、それが今では、世界にも誇れる芸術となり、村人たちは、大変な富を手に入れることができたのです。もちろん、その影には、トム・ブロームフィールド氏が南アや欧米諸国へ粘り強く売り込んだ功績が大きいのでしょうが、地元にある素材「石」を使い、村人の持つ潜在的な「能力」を引き出し、単純な道具「のみ」と「金槌」、「紙やすり」だけですばらしい芸術を生み出しました。

ここに、私たちが国際協力を行う上での、大きなヒントが隠されているのではないでしょうか。

TICOへの入会方法

会員となって資金面からもTICOの活動をサポートしてくださる方を募集しています。会員の方には、TICOニュースレター “Face to Face” を毎号お送りいたします。

年会費

賛助会員	個人	¥12,000
	学生	¥6,000
	団体	¥15,000
正会員		¥12,000

※通常は賛助会員でのご入会をお願いしています。総会での議決権を持つ正会員を希望される方は事前にご連絡下さい。

入会ご希望の方は、年会費を郵便振替にてお支払い下さい。郵便局備え付けの振替用紙で、次の口座へお願いいたします。

口座番号 01640-6-37649
加入者名 TICO

ご住所・ご氏名・お電話番号の他に、Eメールアドレスもお持ちでしたら通信欄にお書き添え下さい。
なお、ゆうちょ銀行自動引き落とし、クレジットカード払いも可能です。詳しくはホームページをご覧になるか、下記までお問い合わせ下さい。

TICOニュースレター Face to Face 第25号
2011年4月発行　発行人：吉田　修
編　集：瀬戸口　千佳

特定非営利活動法人 TICO 事務局
〒779-3403　徳島県吉野川市山川町前川120-4
電話／ファクス：0883-42-2271
メール：info@tico.or.jp　/　ウェブサイト：www.tico.or.jp